学校法人 福島成蹊学園
福島成蹊中学校･高等学校
令和５年 10 月５日　NO.12
文責　校長　本田　哲朗

一 貫 コ ー ス 通 信

人間は一茎の葦である

秋分が過ぎて日照時間が一日の二分の一を下回った。気温の源は日射なので、流石に猛暑はあっという間に後退りした感が在る。これに合わせ、空は澄んで一挙に宇宙に吸い上げられる様に高みを増し、青さえも藍に感じられる様になって来た。では、どこまでが空で、その先の宇宙はどこからなのか…？　地学（Geology）では地球に張り付く空気の層を気圏と定義している。濃淡は在るが、おおよそ 500 キロメートルまで存在し地球の一部とされている。言うに及ばず、その先が宇宙空間になる。気圏が地球内(一部)なら、国際宇宙ステーションの高度 408 キロメートルはまだまだ地球内と言う事で、捉え様によっては妙な話になってしまう。(因みに国際宇宙ステーションはこの高度を 7.8 ㎞/s で地球を周回している。)

ところで、空気も質量を持つので、当然その重量が地表に作用する。この重さの一定面積当たりの値が気圧(空気が地表に及ぼす圧力の略)で、ちなみに、1 気圧≒1013.25hPS(ヘクトパスカル）である。この値は一方を閉じたガラス管に液体金属である水銀(Hg)を満たし、倒立させると 76ｃｍの所で静止するのをトリチェリー(伊)が発見した事で求められた。トリチェリーは水銀面上の空間が**真空**で在る事を**発見**したのだが、**パスカル（仏）は７６ｃｍのＨｇ柱の重量と、約５００㎞まで存在する空気層の重さが釣り合うと考え**、始めて大気圧を数値化した。この偉業から、今日では気圧(圧力)の単位に名前が用いられている。

それでは、パスカルは科学者なのか？　否定はしないが、その枠に収まらないと言うべきだろう。本に因ると、哲学・倫理・神学・宇宙・数学…等、様々な対象(ジャンル)を題材に思考を巡らしていた様だ。彼の備忘録的著書パンセ(フランス語で『思考』の意味)は、遺稿集と言って過言ではないが、これ等の事が記されている。その中の一節がこちら『人間は一茎の葦にすぎない。自然の中で最も弱いものである。だが、**それは考える葦である**。彼をおしつぶす為に、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分だ。だが、たとい宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬる事と、宇宙の自分に対する優勢を知っているからである。宇宙は何も知らない。だから、**われわれの尊厳のすべては、考えることのなかにある**。われわれはそこから立ち上がらなければならないのであって、われわれを満たすことの出来ない空間や時間からではない。だから、**よく考えることに務めよう**。ここに道徳の原理がある。』である。この一節は、私が大学 1 年の時、パスカルを論じたある本の中で出会った。以来、この言葉は私をずっと励まし続けてくれている。何か物事が上手く行かなくなった時、勉強に行き詰まった時、先行きが見えず、不安に苛まれた時等…数え上げたら切りがないが、きっと偉大な哲学者も私達同様、様々な場面場面で考え続けたに違いない。ヒトの定義には事欠かないが、私はこのパスカルの言い回しは、デカルトの思う存在に次いで本質を捉えていると思うのである。